

紀の川の現状説明

(紀の川河川整備計画の検討)

国土交通省 近畿地方整備局

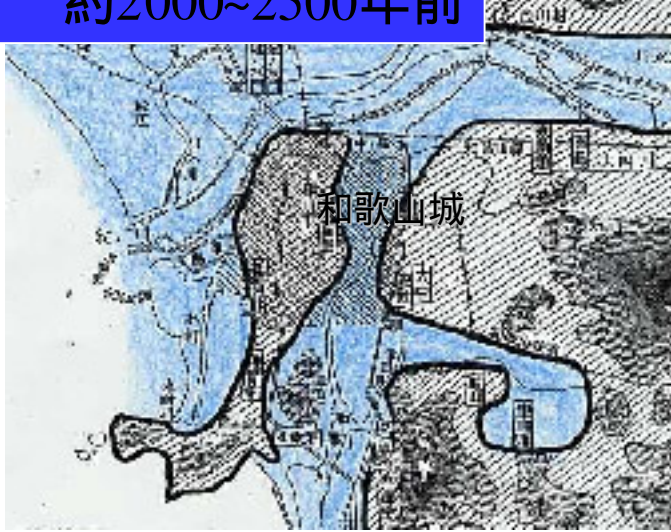
第1章 紀の川のおゆみ

第1節 紀の川の歴史

第1項 紀の川の流れとくらし

紀の川の下流部の変遷

約2000~2500年前



約400~500年前（江戸時代）



約1000~1500年前
（奈良～平安時代）



現在



約 2000~2500 年前は、現在の和歌山市の大半は一面の海でした。その後、土砂の堆積及び海面の低下などにより、400~500 年前には、紀の川の流れは、南方に向きましたが、1620 年の大洪水により河口が現在の位置になったとされています。

衣食住のはじまり

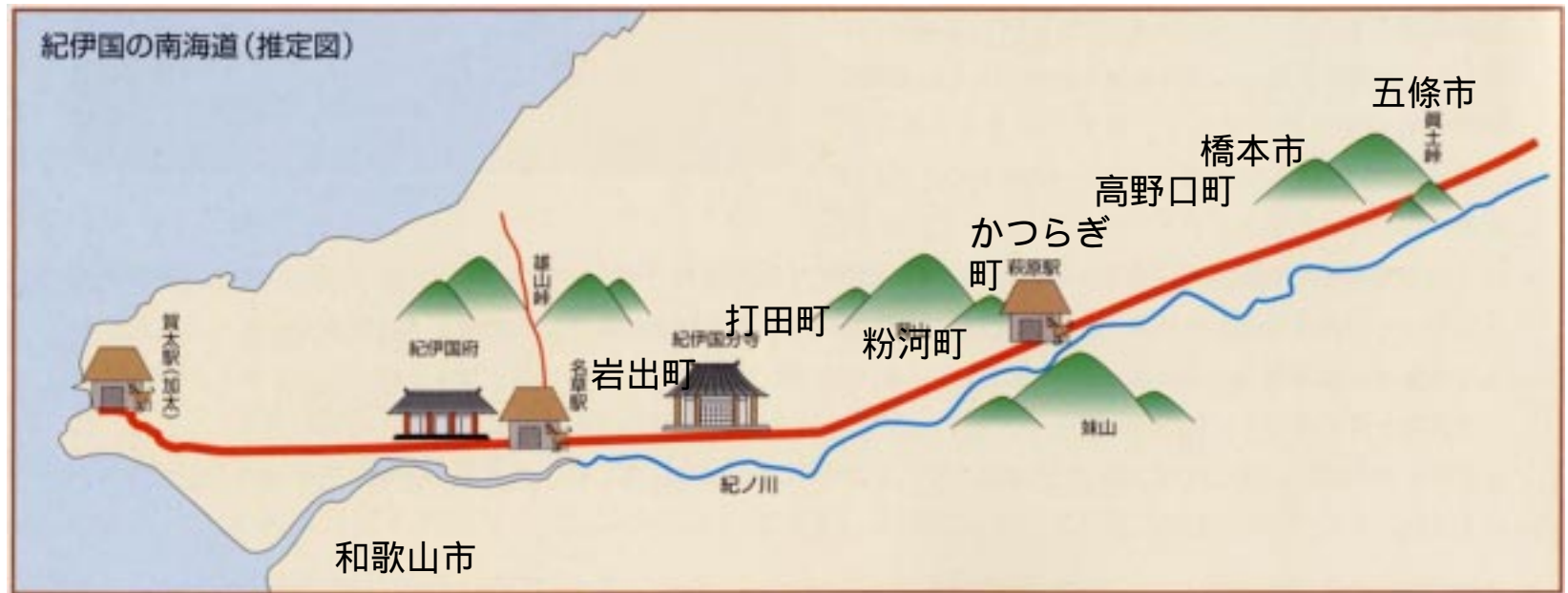
紀の川周辺では、古くから人々が生活していたことを記す遺跡が多く発見されています。和歌山市の鳴神（なるかみ）、禰宜（ねぎ）などでは、貝塚が発見されており、その貝殻などから、当時この付近を紀の川が流れていたことがわかります。



出典：「紀の川 - 水の歴史街道 - 」より

奈良時代

奈良時代には、奈良に平城京という都がおかれ、その都につながる南海道という道が紀の川の北に沿ってありました。また、南海道の途中には、名草駅（なぐさのえき；和歌山市）、萩原駅（はぎわらのえき；かつらぎ町）などがおかれ、旅人の休憩場所となり紀の川の美しい景観が旅人にやすらぎを与えました。その様子は、万葉集にも多く歌われています。



出典：「わかやまDE発見」より

鎌倉・室町時代

10世紀の中頃から、都や他国（国内）との行き来に便利な紀の川沿いに多くの荘園が発達しました。

また、荘園の発達に伴い、産物の取引が盛んになり、紀の川は、その流通に大きな役割を果たしました。



出典：「わかやまDE発見」より

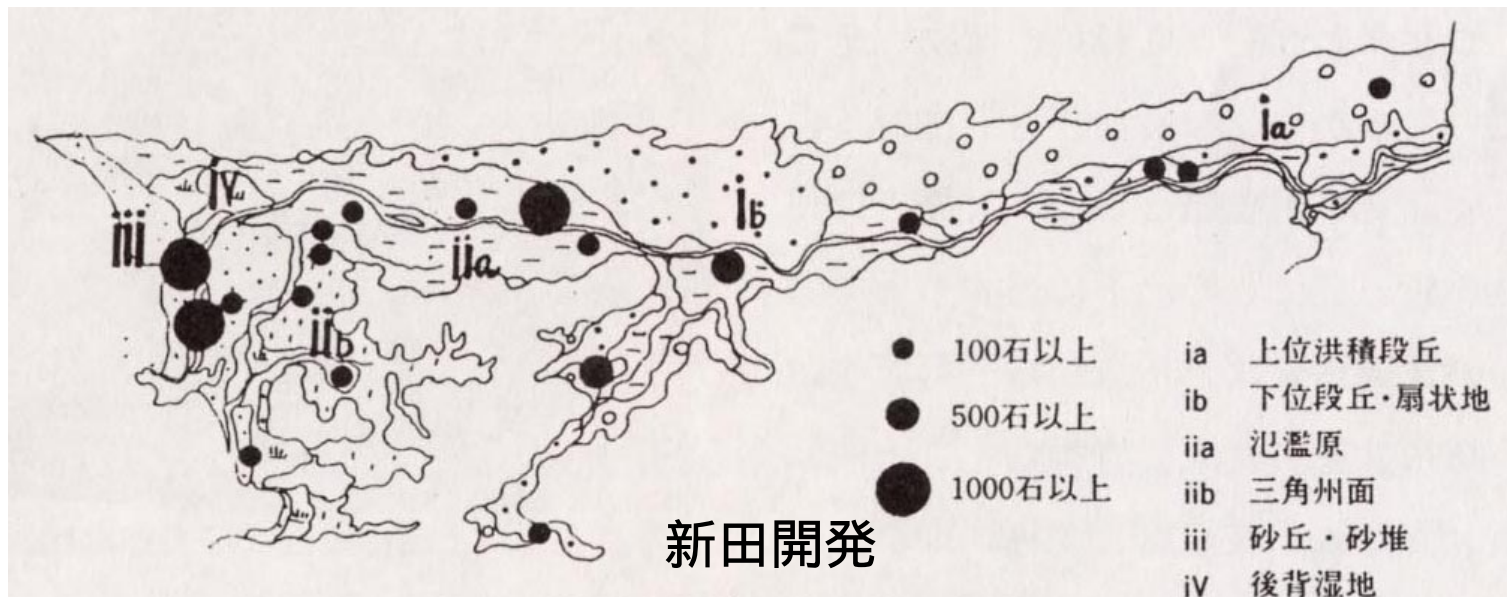
江戸時代

紀州藩の5代城主であった徳川吉宗は、財政を立て直すため、井沢弥惣兵衛や大畑才蔵など才能のある役人を用い灌漑施設や新田開発につとめました。

この新田開発にあたっては紀の川に連続した堤防をつくり、これまで氾濫原であった肥沃な土地を利用する方法を用いました。下図は、新田開発された石高()を示しています。

() 1石 = $0.18 \text{ m}^3 = 100 \text{ 升}$

出典：「紀の川 - 水の歴史街道 - 」より



江戸～明治時代（舟運）

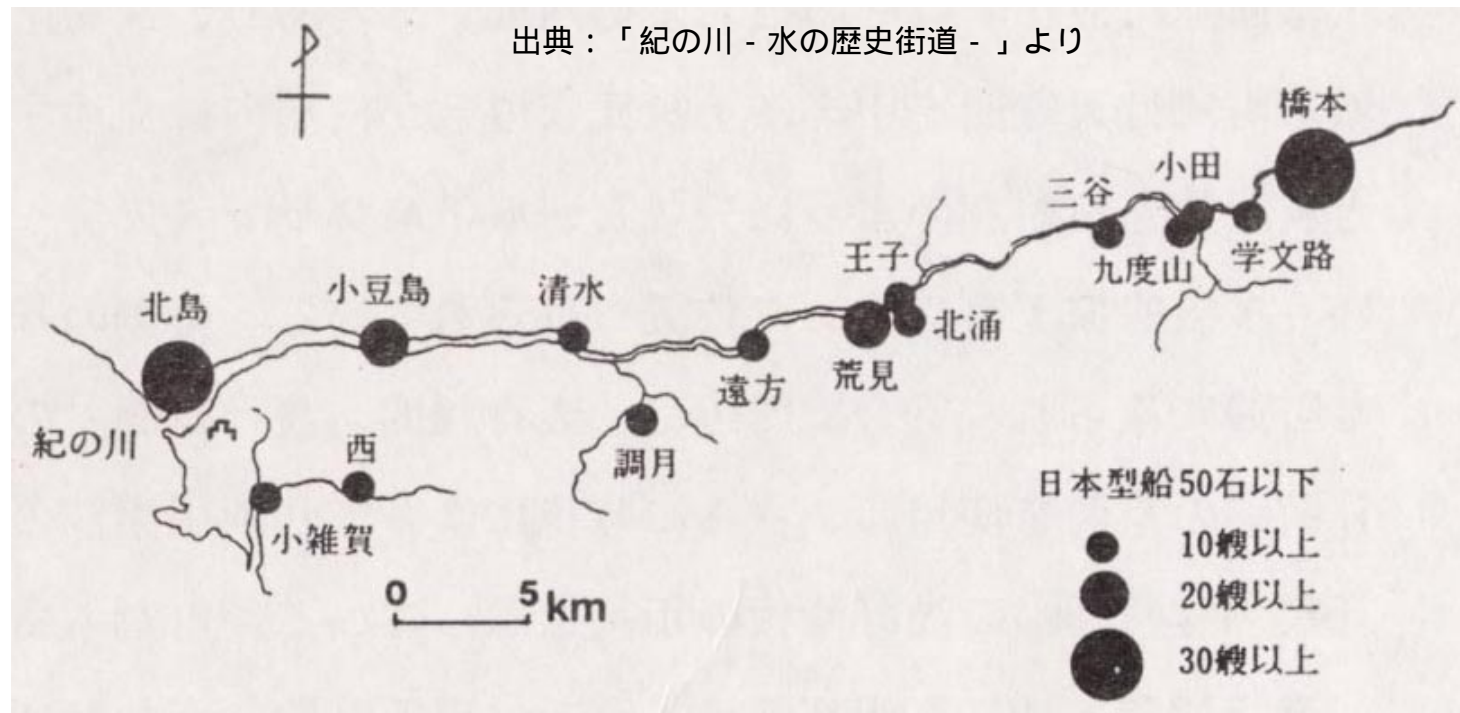
紀の川は、奈良盆地と和歌山平野、さらには瀬戸内海を結ぶ交通上の動脈として重要な役割を果たしてきました。

江戸時代の紀の川水運は、城下若山から約50 km上流の橋本まで「川上船」が往来していました。

下流からは、塩や米、野菜を上流に運び、上流からは、板や紙、茶、煙草などが下流に運ばれました。



出典：「紀の川 - 水の歴史街道 - 」より



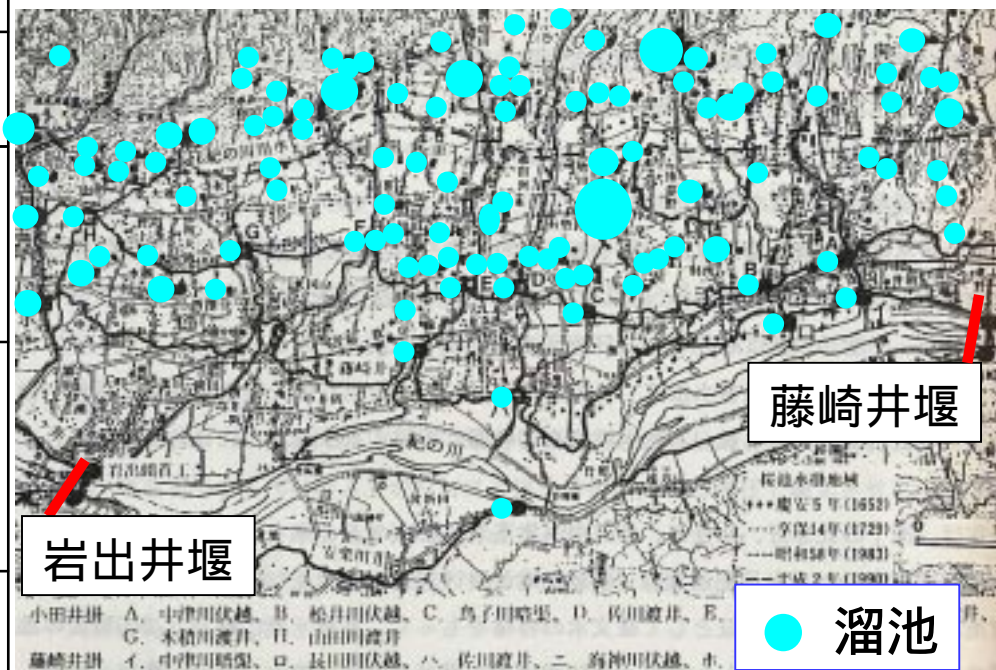
紀の川の水利用

紀の川北岸に広がる河岸段丘面は、降水量が少なく地形的構造により、紀の川からの取水を阻まれていたため、溜池や小河川からの取水にたよるしかなく、水不足に悩まされていました。

江戸時代に入り、大規模な新田開発が行われるようになり、紀の川から直接取水する井堰が多く造られました。

郡名	井堰名	水掛高(石)	現在の井堰 ()内は受益面積
伊都	小田井	13,000	小田統合井堰 (1,022 ha)
	七郷井	3,500	
那賀	藤崎井	5,800	藤崎統合井堰 (1,276 ha)
	荒見井	280	
	段村井	650	
	小倉井	3,500	岩出統合井堰 (2,648 ha) (新六箇井 385 ha)
六箇井	13,000		
宮井	28,000		
名草	四箇井	4,700	(貴志川流域)
	佐々井	880	
那賀	諸井	950	(貴志川流域)
	丸栖井	430	

出典：「紀の川 - 水の歴史街道 - 」より



1石 = 0.18 m³ = 100 升

昭和（戦時中）時代

第2次世界大戦では、和歌山県下で200回以上の空襲があり、和歌山市内は焼け野原となりました。

死を逃れた人の中には、紀の川の河原などで不自由な生活を送る人もいました。

戦後の河川敷の状況

空襲により焼け野原となった和歌山市内



出典：「わかやまDE発見」より

紀の川河口の工業

紀の川河口から有田川河口までの沿岸は明治以降、木材工業や繊維工業が発達してきました。

昭和17年には、紀の川河口北岸に製鉄工場がつくられ、軍事用の兵器の生産を行いました。製鉄には、紀の川の水が用いられました。

また、戦後も鉄鋼生産を行いわが国の発達に寄与しました。

